

書評

笠原俊彦 著

対人恐怖と社会不安障害

診断と治療の指針

高橋 徹

対人恐怖の概念と診断，治療の進め方，臨床の実際の三部からなる。第一部では，対人恐怖の諸症状，その構造と内容，対人恐怖心性と現実とのかかわり方の諸相など，対人恐怖の臨床的な諸特徴が，著者が扱った症例の数々の例示をもとに懇切に解説されており，さらに，対人恐怖のひきこもりの病理が，対人恐怖の不安の考察および醜形恐怖を取り上げての対人恐怖の発達心理学的考察をもとに論じられている。第二部では，外来診療における精神療法的アプローチの仕方，薬物療法の実際が，やはり自験例をもとに解説されている。第三部では，対人恐怖の周辺的な病態の数々について，とくに統合失調症とのかかわりが取り上げられている。どの部をとっても，その平易な叙述をとおして，読む者に著者の対人恐怖研究への熱意と臨床経験の厚みと深い考察が伝わってくる。

ところで，近年の精神障害診断分類(ICD-10；Ch VやDSM-IV)に馴染んでいる人には，「対人恐怖」は，もはや古びた病名でしかないであろう。今では「社会恐怖」あるいは「社会不安障害」と呼ばれている。しかし，新旧病名のラベルの貼り換えだけでは済まされない重要な問題を，著者は，第一部の「対人恐怖から社会恐怖へ」および「社会不安障害(SAD)の概念および定義」の章で論じている。伝統的診断と操作的診断は互いに病態把握の仕方を異にしており，対人恐怖と操作的診断単位である社会恐怖あるいは社会不安障害とは「全面的に一致した病態とはいえない」ことを，臨床的症状論のレベルでの両者の詳細にわたる比較をとおして示し，「社会恐怖と診断されない対人恐怖」

群は「対人恐怖の定型例ないし確信型対人恐怖」(山下)に相当すると論じている。この群は操作的診断基準に従えば「妄想性障害」に診断分類されかねない。確かに，身体のある部位のなんらかの欠点を自覚し，その欠点を気づかれてしまい，しかもその欠点が相手(たち)に不快な感じを起こさせるのではないかという，関係念慮や加害恐怖が際立っている。しかし，著者は，このような関係念慮や加害恐怖をもって妄想性障害と診断することに反対し，理由として，これらの関係念慮および加害恐怖は身体の欠点についての悩みから了解し得る症状であること，対人恐怖症状はある一定の対人状況で発現するという特徴があつて，対人恐怖が状況依存性の特徴を有するのに対し妄想性障害に分類される妄想にはこのような状況依存性がみられないことを挙げている。

現代精神医学はパラダイムの変換期を迎えており，病態把握においても伝統的な概念描写モデルに従う代わりに没理論的パターン認識による方法が用いられるようになり，もはや対人恐怖の概念も顧みられなくなりつつある。しかし著者はこの変換期を見きわめ，その新しい病態把握に即した，臨床的事実としての対人恐怖の病態をみごとに記述している。本書はまさに，最新の対人恐怖の診断と治療の指針の書である。

(東京国際大学大学院臨床心理学研究科)

● A5 210頁 2005 定価3,570円(本体3,400円+税) 金剛出版

■ 訂正とお詫び ■

本誌 47 巻 10 号，1153 ページに以下の誤りがありました。訂正し，お詫び致します。

1153 ページ タイトル部分一番上

(誤)笠原俊彦 著

(正)笠原敏彦 著

『精神医学』編集室